

『聞一多伝』日本語版「後書き」

聞 黎明

(訳) 鈴木義昭

一九八八年、私は『聞一多年譜長編』を編纂した。初めは、聞一多研究者の方々に基本的な資料を提供して、研究時の労苦を除こうと心掛けただけであった。「ただ、耕耘を問うも、収穫を問うなかれ」という言葉は実に言い得たものである。執筆を開始した時は、後代の人間の前代に対する義務として始めたのであった。『長編』を書き上げた時、中国出版界は折しも不況の真つ最中で、やむなく原稿を放置せざるを得なかった。この時、聞一多の親友で、「黄河大合唱」で知られる張光年先生は、私に集めた資料を利用して伝記を書くように勧めてくださった。私の所属する中国社会科学院の同僚たちからも、多大なる配慮と支持をいただいた。そうこうしているうちに、二年がたち、『聞一多伝』が完成したというわけである。

出版の機会という点から言えば、『聞一多伝』は『長編』よりずっと幸運であった。原稿を人民出版社に送ってから、私は地方に行くことになった。二カ月後に北京に帰ってみると、それはすでに上梓され、手直しをする機会もないほどであった。結果として、「弟」が「兄」よりも早く世に出ることになったのである。これが奇跡でなくして、何であろう。続いてもう一つ奇跡が起こった。一九九三年、北京大学を学術訪問していた早稲田大学の鈴木義昭教授

がたまたま書店で本書を見つけたのだ。鈴木教授は博士課程在学時に、聞一多の著作並びに聞一多研究書を読んだことがあった。後に彼が私に語ったところによれば、彼は、聞一多について理解していたつもりであったが、本書を読んで知らないことが多すぎると思ったと言う。本書の中の史実の幾つかについても彼は初めて知った。この刹那、彼は本書を翻訳しようと決心したと言うのだ。その時は、この決心が彼にとっても私にとっても、あるいは日本の聞一多研究にとっても中国の聞一多研究にとってもこれほど意義のあるものとは想像すらできなかった。

一九九四年、鈴木教授は再び北京大学を訪問した。北大出版社社長兼主編、彭松建教授はどのようなルートによったかは知らないが、彼が拙著を翻訳しようとしていることを聞き、積極的に出版したいと申し出てくれた。そこで、彼は私の大伯父に当たる、北京大学西語系教授聞家駟先生を訪ね、直ちに私と鈴木義昭教授とを会わせてくれたのだ。我々の相互協力は全く愉快に進み、二人は自然に終生の友人となった。

鈴木教授の翻訳作業は簡単ではなかった。数年来、教学の余暇のほとんどの時間を本書の翻訳作業に当てた。彼は毎年必ず二度、中国を訪問し、必ず訳出部分を携行して私と切磋琢磨し、交流を重ねた。中国に滞在中、認識を深めるため、労苦を厭わず武漢、青島、昆明、蒙自等の地を訪れて参観した。その足跡は聞一多の生活した土地のほとんどに及ぶ。事実、この翻訳の仕事は、鈴木教授一人によるものである。彼は長いこと中国現代文学の研究に携わり、多年に亘りその切り口を模索していたが、今や、彼はついに聞一多研究に突破口を見出し、全力投球をしているのだ。数年来、真面目な努力を積み重ねて、鈴木教授はそうした成果を発表している。私が読んだものだけでも、「聞一多と新詩」、「聞一多と前期『新月』派」、「徐志摩と朱自清、聞一多」、「聞一多と海外」、「聞一多の見た魯迅」、「聞一多と商籟体」、「聞一多と胡適『八不主義』」、「日本における聞一多『死水』の翻訳と解釈」等の論文がある。鈴木教授は、中国の学者が思いも寄らなかつたり、研究しがたい分野などを扱っている。例えば、彼が雑誌『改造』「現代支

那号」に発表された聞一多「春光」詩を報告した論文では、一九二六年七月にすでに、聞一多の作品が翻訳、紹介されたことが書かれており、私は驚喜を禁じ得なかった。この訳詩は、目下知り得るかぎりでは、聞一多の作品として最も早く日本語に翻訳されたものというばかりでなく、恐らくは最も早く外国語に翻訳されたものでもある。こうした成果は、次第に中国の学者の注意を引き重視されるようになってきている。鈴木教授の翻訳は研究と平行して行われたものであることを物語っているのである。

鈴木教授は、自分の研究を行うだけでは満足できず、外にも推進的な作業を行っている。早稲田大学教授（現名誉教授）の芦田孝昭先生、古屋昭宏教授、工藤元男教授等とともに大学の承認を得て、特定課題「聞一多の総合的研究」を組織したこともある。彼らの影響の下、校内には小規模な聞一多熱が起きた。一九九六年、私が慶応大学の招きを受けて訪日した時も、早大は特に二度に亘って私のために学術報告会を開いてくれた。この会には教校、十余名の大学院の博士課程、修士課程の学生が参加した。思うに、これも芦田、鈴木両先生の教化のお陰であろう。現在、彼らはこうした基礎の上に、全日本規模の聞一多学会も準備中で、東京、京都、広島等の学者の参加も予定されているとのことである。今日、日本はすでに世界一聞一多研究者が集まる国となったと言える。後継者に人を得たという意味では、鈴木教授と彼の恩師である、日本の聞一多研究のもう一人の伝播者、芦田教授にも感謝を捧げなくてはならない。

『聞一多伝』の日本語訳は、同系統の著作の中では初めて外国語になるものである。これについては、彭松建教授及び許耀明助教授の眼力と気迫とが分かちがたい。中国にあっては、彼らは出版者であるとともに学者である。こうした条件があつてこそ、彼らは「特筆すべき人」を描いた著作を世界に紹介することができたのであるし、中日両国に文化交流の懸け橋を懸けることができたのである。

祖父聞一多の同僚であり、親友でもある、中国民主同盟中央委員会名誉主席、全国人民代表大会常务委员会副委員長費孝通先生は、長年に亘って聞一多研究推進のために多くの工作を行って来られた。今回、繁忙な國務院の仕事の中、本書の日本語版のために序を書いてくださった。費先生の真心溢れる序は、先輩の中日文化交流促進への希望を表しているとともに、私にとってもこれ以上ない励ましである。さらに、本書の完成を見ることなく、一九九七年十一月八日、この作業に心を寄せてくれていた聞一多の弟、聞家駟教授が、九十三歳でこの世を去った。我々も翻訳作業に拍車をかけたが、兩人の合作の成果であるこの書をご覧に入れることができなかつたことは、誠に遺憾の極みである。

最後に、日本語版の本書が世に出た暁には、日本の学术界の認めるところにならんことを切に冀うものである。

(一九九七年一月十七日)